

アウグステイヌスにおける確実性の概念

——『告白』第七巻から——

中川 純 男

一

われわれが「確実」と訳しているラテン語は *certus* である。*certus* は動詞 *cerno* に由来する。*cerno* の原意は、ギリシア語 *κρῖνω* のと同じように、「分ける」ことである。「ふるいにかける」「ふるいにかけて不純物を取り除く」といった意味合いを含んでいる。ここから、「他のものから分離する」、「区別する」という意味が生じ、さらに「決着をつける」、「決定する」、「目や精神で「識別する」ことも意味することになる。その完了分詞に由来する形容詞 *cert-*

us の意味も、これにしたがう。その一般的な意味は「他から区別され決まっていること」である。いまわれわれがアウグステイヌスにおいて注目するのは、アカデミア派の懐疑論との関係で、すなわち「懐疑 *dubitatio*」と対照される概念としての、「確実性 *certum*」の概念である。『再考録』では次のようにいわれている。

真理の発見に絶望させ、何かに同意することを妨げ、知者が何かを明白で *certum* なことであるかのように認めることはないと主張するアカデミア派を反駁するために『アカデミア派駁論』を書いた。

『再考録』第一巻一章一節

アカデミア派の懐疑論が二つの論点に要約されている。

真理の発見は不可能であるという論点と、何ごとにも同意してはならないという論点である。certus という語は、いずれの論点との関係でも用いられうる。他から区別して見られていることとしては「真」と近い意味をもち、また確定していることとしては、「頼りになること」「あてにできる」ことを意味するからである。『アカデミア派駁論』のなかに用例を求めよう。たとえば、bonorum certissimum possessione (I, 1, 1) とは、「失われることのないあてにできる財産を所有すること」である。また「世界がひとつであるかひとつでないかいずれかであることをわたしは certum と考えている certum habeo (3, 10, 23) とは、「真であると考えている」ことである。certus の用法は、大きく分けるなら、「決まっている」「確かである」といった「分ける」ことに由来する用法と verus に近い意味で用いられる「見る」ことに由来する用法とに区別することができよう。この二つの意味はもちろん常に明確に区別されるわけではなく、境界にあっていずれか決めたい用例もあるが、われわれはいま主として、認識にかかわる「確実性」について考えることにする。

二

懐疑論の立場を、「確実なもの certum は何もない」と表現することはキケロにさかのぼる。アカデミア派の懐疑論はプラトンのイソクラテスにさかのぼると論じた箇所、キケロは次のようにいっている。

プラトンの書物では、何も肯定されず、肯定否定いずれのためにも多くの論が擁護され、すべてについて探求され、確実なことは何ひとつ nihil certi 語られない。

キケロ『アカデミカ後書』一一・四六

「肯定否定のいずれをも擁護すること」、これが懐疑論の方法であり、懐疑 dubitatio そのものである。このような懐疑の立場が確実性の否定といわれるのである。ではキケロは、certus という語を何らかのギリシア語の訳語として用いているのか。キケロ『アカデミカ前書』および『後書』にその用例を見てみよう。

clara iudicia et certa Acad. pr. 7, 19.

certa et propria nota Acad. pr. 11, 35.

vera et firma et certa Acad. pr. 14, 43.

certis et illustrioribus [sc. rebus] Acad. pr. 29, 94.

veri et certi notam Acad. pr. 32, 103.

certum comprehensum perceptum ratum firmum

fixum Acad. pr. 46, 141.

certus と他の語とのこのように多様な組み合わせは、certus がギリシア語の訳語ではないことを告げているように思われる。リードは『アカデミカ前書』七・一九の用法について、「おそらくギリシア語 τὸ πᾶσι の訳語であろう」と注記しているが、これは正しくないと思われる。τὸ πᾶσι 「明白な、輪郭のはっきりした」の用例はそもそも多くない。懐疑論に關係すると見られるのは、表象についてこの語が用いられている、セクストス・エンペイリコス『学者たちへの論駁』第七卷二五八、ディオゲネス・ラエルティオス『ギリシア哲学者列伝』第七卷四六(SVF I, 53)を除くと、ほとんど見あたらないであろう。セクストス・エンペイリコス『ピュロン主義哲学の概要』によれば、肯定否定両論があってそのいずれも真とは決められないことを呼ぶために用いられている語は、ἀσφάλεια (不明瞭)、『ἀσφάλεια (判別不可能)』などである。しかし、こ

れらはいずれも単独で用いられており、類似の語が重ねられている場合はまれである。しかも、多くの場合、真偽の決定ができないことは特定の表現で表されていない。

アウグスティヌス『告白』において、certus という語は、懐疑論克服の過程を記した箇所の間は縦糸として、話しを進むを司る重要な概念となっている。この語がもっとも多く用いられているのは第七卷であるが、すでに第五卷からその準備は始まっている。マニ教への失望が決定的になった時期を告白した第五卷の最後では次のようにいわれている。

そこで世間で考えられていたアカデミア派のやり方で、すべてについて疑い、何ごとにつけても漂いながらも、マニ教からは離れなければならないと決意しました。……そこで、進路を向けるべき何か確実なことが輝き出るまで donec aliquid certi eluceret、両親から受けとったカトリック教会のなかで、洗礼志願者にとどまることを決心したのです。

『告白』第五卷一四章二五節
また、「神を見る」という体験を記した第七卷につづく

第八巻の始めでは、いわばキー・ノートの変わったことを告げるかのように、いわれている。

あなたの永遠な生命についてはすでに確実でした *certus eram*。まだ謎の内に鏡をとおしてのようにはか見ていませんでしたが、それでも、不滅の存在について、すべての存在がそこから由来するということへの疑いはすべて取り除かれていました。あなたについてもっと確実になることではなく、あなたのうちでもっとしっかり立つこと *nec certior de te, sed stabilior in te esse* を望んでいました。

『告白』第八巻一章一節

三

問題の第七巻に目を移そう。ここでは「ミラノのヴィジョン」としてよく知られている経験が記されている。プラトンの書の読んだことを契機とする、「神を見た」という経験である。その経験は、第七巻で繰り返し記述されているが、そのうちの二箇所では次のようにいわれている。わたしは、あなたの代わりにあなたの幻影を愛してい

るのではなく、いつの間にかあなたを愛していることに驚いていました。しかし、わが神を楽しみ続けることはできず、あなたの美しさによってあなたのもとに引き寄せられるや、たちまちわたしの重さによってあなたから引き離されました。そしてうめきながらこの現実に墜落したのです。重さとは肉적인習慣のことです。しかし、神についての記憶は自分に残され、「寄りすがるべき方が存在するが、自分はまだ寄りすがるだけの者になっていない」——というのも朽ちるものである体が魂を押さえつけ、地に住んでいるために多くを思いめぐらそうにも抑えつけられていたからですから——このことはまったく疑っていませんでしたし、確実でした。あなたの見えないもの、あなたの永遠の力と神性とは、この世のつくられたときから、つくられたものをとおして、知られ見とられるからです。Et mirabar, quod iam te amabam, non pro te phantasma, et non stabam frui deo meo, sed rapiēbar ad te decore tuo moxque diripiēbar abs te pondere meo et ruebam in ista cum gemitu; et pondus hoc consuetudo carnalis. Sed necum

erat memoria tui, neque ullo modo dubitabam esse, cui cohaerem, sed nondum me esse, qui cohaerem, quoniam corpus, quod corrumpitur, aggruat animam et deprimit terrena inhabitatio sensum multa cogitantem, *eramque certissimus, quod invisibilia tua a constitutione mundi per ea, quae facta sunt, intellecta conspiciuntur, semper puerina quoque virtus et diuinitas tua.*

『告白』第七卷一七章二三節

「確實であった *eramque certissimus*」の次にくる *quod* 以下が、確實であることの内容を説明する名詞節なのか、それとも確實であることの理由を説明する従属文であって *quod* は *quia* と同じ意味なのか、一見はつきりしない。その内容をなす *ロマ書第二章一〇節*は、『告白』第七卷では、次に引用する二六節のテキストにも見られるように、ミラノのヴィジョンを語る下敷きとされている。ロマ書にいう「神の見えないものが見てとられる *conspiciuntur*」は自分の経験としての「見た *conspexi*」(7,17,23; 7,20,26)と重ねられている。この意味で *quod* 以下は、経験の内容ではなく経験そのものの聖書の根拠を明らかにした理由文

と考える方がよいように思われる。いずれにしても「*eramque certissimus*」は「まったく疑っていませんでした *neque ullo modo dubitabam*」の同格的な言い換えである。

二六節では次のようにいわれている。

しかし、そのプラトン派の書物を読み、非物体的な真理を探究するよう促され、あなたの見えないものを、つくられたものをおして知り、見てとったのです。

そしてはね返され身をもって知りましたが、わたしの魂の闇のゆえに見ることを許されていないのは何か、を。しかしあなたが存在していること、無限であること、ただし有限なあるいは無限な場所に拡がっているのではないこと、常に同一であり、いかなる部分もいかなる動きにも変わることはないあなたは真実に存在しているということ、そして、あなた以外のものはすべてあなたに由来するということも、それらが存在しているというただそれだけの証拠で *certus certus* でした。これらのことは *certus eram* が、しかしあなたを楽しむには、わたしは弱すぎたのです。

『告白』第七卷二〇章二六節

この箇所も先の二三節と同じ経験を述べていると考えられる。確実である内容は、ここでは、「あなたが存在していること、無限であること、……」と説明されている。二番目の *certus* は最初の *certus* を繰り返して、文章を完成させていると考えられるから、意味に関しては最初の *certus* と同じであろう。このような *certus* の用法、すなわち懐疑と対比されつつ、*certus sum* という形で一人称の主語について語られる、いわゆる述語的用法にいまわれわれは注目したい。

四

『告白』第七巻で計九回用いられている *certus* およびその変化形の用例の内七回が「わたし」についての述語的用法である。これらの用例では、一人称の動詞とも用いられていることが重要な働きをしていると考えられる。このことは、次の用例と比較すれば明らかであろう。

あなたはわたしを内からつついて、あなたがわたしにとつて、内なるまなざしにより確実となる *certus esse* まで、わたしが我慢できないようにされました。

『告白』第七巻第八章一二節
文法的な構文は、主語が一人称ではなく二人称であることをのぞいて、上記二例と同じである。しかし、*certus* の意味は明らかに異なっている。先の *certus sum* がわたしにとつて確実であるという意味であったのに対し、ここで *certus esse* は神にとつて確実であることではなく、わたしにとつて神が確実であることだからである。第七巻で語られている一人称の *certus sum* は、*certus* の通常の意味にはない意味合いを含んでいると考えられる。この場合の、*certus* を通常の訳語で「確実である」と訳すのは厳密には適当ではないかもしれない。通常、確実性が帰されるのは知られている対象であることがらであつて、主語である「わたし」ではないからである。

TLI はこのような用例を、*is qui scit* という項の下に集めている。「知っているひと」が *certus* と呼ばれる場合であると説明しているのである。IS の *certus* の項の説明によればことがらの形容から、そのことがらを確信しているひとの形容に移し替えられた場合である。TLI も IS も、用例として挙げている箇所はそれほど多くなく、かなりの部分は同一の箇所である。より新しい Glare の

Oxford Latin Dictionary は、この用法を採録してゐない。古典期の用法ではなごて考へてゐるからでもなご。certus sum という用例が古典期の作品に用いられていないわけではない。しかしその意味は、われわれがいま問題としているアウグスティヌスの用例とは異なっている。次の例を見てみよう。

ほかに何があるだろうか。ぼくの考へはこうだ。すべてが滅びたことをばくたちは知っている。

Quid aliud? quid? hoc, opinor: certi sumus peris-se omnia.

キケロ『アッティクス宛書簡』三・一三・二
手紙の一人称複数であるから、一人称単数と考へてよい。キケロがいつているのは、「じっさいにすべてが滅びてしまった」ということではなく、「すべてが滅びてしまったと考へても間違いではないほどわたしは政治的に追いつめられた状況にある」ということである。

いつまでも続くであろうよい評判を予想して楽しみ、死後に受けるであろう栄誉を確信しているひとについて、ひとそれぞれの意見はあろうが、わたしとしては最高に幸せなひとと思う。

Alius alium, ego beatissimum existimo, qui bonae mansuraeque famae praesumptione perfuritur certusque posteritatis cum futura gloria uiuit.

カエキリウス・セクンドゥス・プリニウス

『書簡』九・三・一

これは「確信する」と訳すのが適当な場合である。

ISがこの用法として引用している用例の多くは、certiorem facere (factus) の用例である。これはラテン語では「何かを教える」「伝える」こと、「何かを知らされる」「知る」ことを表す慣用的な表現である。ひとに何かを伝えることが、「そのひとを certus にする」と表現されているのである。では、これらの用法が表す知は、どのような知であろうか。プリニウスの用例をわれわれは「確信する」と訳すのが適当であると述べた。死後の名声を自ら知ることができない。死後の名声について certus であるとは、死後の名声を知っていることではなく、知ってはいないが信じるに足る現在の根拠を手にしている praesumptio ことである。知るとはことがらそのものを認識することであり、知っているとはそのような認識をすでに経験していることであるとすれば、『アッティクス宛書簡』の用法も、cer-

certusの対象は現前してない将来であって、「すべては滅びてしまったと確信する」といわれているのであるから、プリニウスの用法から遠くはない。これらの certus を「知っている」という意味の用例であると認めることにはいささか抵抗がある。むしろ、ことがらとしては不確かで知られていないが、主観的には確かであり確信しているという用法であると考えるべきであろう。TLI や LS があげる用例のなかに、われわれが問題としている『告白』第七巻の用例と同じであると確信できる certus sum の用法は見あたらない。

一人称で用いられる certus の意味を考える上で、次の資料が助けになるであろう。

Certus ἀκριβής, ἀληθής, βέβαιος
 Certior fit γινώσκει
 Certum sit ἐπιλογισται
 Certus sum πέπεισμαι, ὀδῶ

Glossae Latino-Graecae (ps.-Philoxenus)

六世紀ごろ編纂されたと推定されるこの語彙集は、同じ certus という語に、語形、人称によって異なる訳語を与えている。certus sum は、このように一人称固有の意味

をもつと考える方がよい。近代的辞書は人称による意味の相違を認めないという前提の上につくられているから、このような一人称固有の意味を精確に把握できていない。しかし、その一人称の意味の中でもアウグスティヌスの用法は独自であるように思われる。

五

ふたたび、『告白』第七巻の用法に目を向けてみよう。

最初の用例において、アウグスティヌスは新プラトン派の書物を読むことを契機とする「神を見る」という経験について語っている。神に引き寄せられるや、次には引き離され、残されたのは神についての記憶 memoria tui であるという。この記憶が自分について、「寄りすぎるべき方が存在するが、自分はまだ寄りすぎるだけの者になっていない」ことを疑わなかったといわれている。同じ経験を述べた二六節の場合も、神を見たが、つきかえされ、何を見るものが許されていないかを身にしみて感じたが、「神が存在していること、無限であること、ただし有限あるいは無限な場所に拡がっているのではないこと……、は確実であっ

た」といわれている。これらの確実性は、将来のことやすでに実現しているかもしれないが不確かなことを確信するという意味での確実性ではない。では、いかなる意味で確実なのか。

二三節の文脈を検討してみよう。神を見るという経験は突如なんの脈絡もなく与えられたとは考えられていない。引用した文に続く箇所では、「神を見た」という経験を説明する形で、次のようにいわれている。「天上地上の物体の美しさを何によって美しいと認めるのか、可變的なものについて、「これはかくあるべきで、あれはかくあるべきでない」と正しく判断し言明するとき、わたしに何が現前しているのかを探求して、可變的なわたしの精神の上にある、不変で、真実な真理の永遠性を見いだしたのです」といわれている。アウグスティヌスは正しい判断の根拠を探求し、その根拠を見いだした。これが神を見るといふ経験であった。したがって「神を見る」ことにより見いだされたのは、判断の変わることのない根拠である神だけでなく、変わりうる事物についての判断の正しさでもあったはずである。じじつアウグスティヌスは、神についての確実性と精神や被造物についての確実性が、いずれも「神を見る」

ことによってもたらされたといっている。

「神を見る」といふ経験が、「可變的なわたしの精神の上にある、不変で、真実な真理の永遠性を見いだした *inveneram incommutabilem et veram veritatis aeternitatem supra mentem meam commutabilem*」というように、ことを重ねて表現されていることにも注意しなければならない。「見いだした」といふ動詞の直接の目的語は「永遠性 *aeternitatem*」であるが、そこにさまざまな修飾語が付加されている。アウグスティヌスが確実である *certus sum* としている内容は、「見いだした」あるいは「見た」といふ動詞の目的語として表現されていることの分析的表現であると考えられる。一六節では、「わたしの精神の上にある、不変の光を見た」ということばに続いて、「真理を知るものはこの光を知り、この光を知るものは永遠を知る。愛はこの光を知る。永遠な真理にして真なる愛、愛しい永遠 *O aeterna veritas et ver caritas et cara aeternitas*」というよく知られたことばが続いている。アウグスティヌスは、非物体的な光を見るといふ経験がさまざまな知の源泉であったと考えている。

判断の確実性が主語と述語との結合の正しさであるとす

るなら、アウグスティヌスが確実であると呼ぶ判断は、主語と述語との結合の正しさが、両者はひとつのものであると「見られている」ことによって、すでに与えられている判断である。表現の上では主語と述語を区別し、判断ないし命題の形で表されるような内容を、いわばひとつのこととして「見る」という経験が、「神を見る」という経験であったと考えられている。『告白』第七巻の *certus sum* は、それに先行する *vidi* 「見た」(7,10,16) (一六節)では *expecto* という語が用いられている) によって保証された確実性である。確実であることは見たこと、この意味で経験したことに他ならない。このことはもちろん、すべての経験に確実性を付与することではない。確実であるとされるのは経験そのものではなく、経験から導きだされた判断であり、しかもその判断が分析的に導きだされている場合にかぎられる。

六

このような *certus sum* の用例は、『アカデミア派駁論』には見いだされない。第三巻のすでに言及した箇所では、

次のようにいわれている。

しかしまだ知者の近くから遠くにいるわたしでさえ、これら自然学に含まれることについて少なからず知っている。というのも、世界がひとつであるかひとつでないか、またもしひとつでないなら有限であるか無限であるかいずれかであるということを確実なこととしてもっている *certum habeo*。

『アカデミア派駁論』第三巻一〇章二三節ここで確実 *certus* という形容詞が修飾しているのは、認識の対象であって認識者としての「わたし」ではない。しかし、われわれがアウグスティヌスに独自であると指摘する用法の萌芽と認められるような表現は見いだすことができる。

だから、残っている問題は、感覚が伝えるとき、真実を伝えているかどうかという問題だ。エピクロス派の誰かがいったとしよう。感覚について、非難すべきことは何もない。感覚にできる以上のことを感覚に要求するのは不当だからだ。目は、見ることのできるものすべてを真として見ている。では水につかった権について見ていることも真なのか。もちろん真だ。そのよ

うに見られる原因があるのに、もし水につかった權がまっすぐに見えたとしたら、かえて虚偽を伝えていると目を責めただろう。そのような原因があるとき、見るべきことを見ていないのだから。多くをあげる必要があるだろうか。塔の動き、鳥の首毛など数え切れないことについて、同じようにいうことができる。もし同意すればわたしは欺かれる、というひとがいる。それなら自分に現れていると確信している *persuade*。以上のことには同意してはならない。そうすれば欺かれることはない。誰かが、「これがわたしに白く見えることをわたしは知っている」、「この聞こえている音が心地よいことをわたしは知っている」、「これがわたしによい香りであることをわたしは知っている」、「これがわたしに甘い味のすることをわたしは知っている」、「これがわたしにとって冷たいことをわたしは知っている」というなら、わたしはアカデミア派のひとが彼を反駁できると思わない。

『アカデミア派駁論』第三卷一一章一六節
よきに *Glossa* が *certus sum* を、ギリシア語で *πέπεισμαι* と言ひ換えていたことを思い出さなければならぬ。

日本語では「確信している」と訳されるであろうが、しかしそれは根拠を欠いた信念として確信されるのではなく、反省的に確認された認識であるから確信されるのである。また次のようにいわれている。

それゆえ、わたしは、知者にとって知恵は確實である *certain esse* と思う。つまり、知者は知恵をとらえており、だからまた知恵に同意するとき、思いなしているのではない。

『アカデミア派駁論』第三卷一四章三二節
アウグスティヌスにとって、知恵を知っていることは、知恵に同意していることを含意している。このような主張が、懷疑主義の立場にとって認めがたいものであったことは第二巻に記されたアリピウスとの対話が示している。懷疑主義者にとって、知っていることと同意することは別の論点を構成すべき問題である。しかし、アウグスティヌスにとって *certus sum* は、知っていることであるとともに同意していることである。

このような確実性の概念は、のちにデカルトに受け継がれる。

このようにして、私は、すべてのことを存分に、あま

すところなく考えつくしたあげく、ついに結論せざるをえない。「私はある、私は存在する」というこの命題は、私がこれをいいあらわすたびに、あるいは、精神によってとらえるたびに、必然的に真である、と。しかしながら私は、いまや必然的に存在するところの私が、いったいかなるものであるかは、まだ十分には理解していません。

デカルト『省察』二(井上・森訳)

「わたしはある」、「わたしは存在する」という命題は、必然的に真である。しかしこれらの命題は、すでに「わたし」についてもっている何らかの観念から導き出されたのではない。『省察』二で、*certus sum* という表現は用いられていない。

私は考えるものである。いいかえれば、疑い、肯定し、否定し、わずかのことを理解し、多くのことを知らず、意志し、意志しないものであり、さらには想像し感覚するものでさえある。というのも、先に私の気づいたように、たとえ私が感覚したり想像したりするものが、私の外においてはおそらく無であるにしても、私が感

覚および想像と名づけるあの意識様態は、たんにそれらがある種の意識様態であるかぎり、私のうちにある、と私は確信しているからである *sum certus*。……わたしが考えるものであるということこそ、私は確信している *sum certus me esse rem cogitantem*。

デカルト『省察』三

「わたしが *res cogitans* である」という命題は、わたしの経験、すなわち「疑っている」「肯定している」等命題化された形では *cogito* から導き出された判断であり、これについてデカルトは *certus sum* といっている⁽¹⁾。われわれが問題としてきた確実性とは、経験から導き出された判断の属性である。

引用文献

- デカルト『省察、情念論』井上庄七、森啓、野田又夫訳、中公ク
ラシックス、中央公論新社、二〇〇二。
所雄章『デカルト『省察』訳解』岩波書店、二〇〇四。
Corpus Glossariorum Latiorum, rec. Goetz, Leipzig/Ber-
lin, 1888-1923 (II *Glossae Latinograecae et Graecola-
tinae*, 1888, repr. 1965).

Glare *Oxford Latin Dictionary*.

LS Lewis & Short, *A Latin Dictionary*.

Reid, J. S. M. *Tulli Ciceronis Academica*, London, 1885, repr. 1966.

TLL *Thesaurus Linguae Latinae*.

注

(1) 所雄章は「sum certus」というこの表現は、「第三首察」で初めて使用され、かつ多用されている」と指摘している。この指摘は正しい。しかし、その理由については触れられていない。p.156. 同じ箇所でもまた「certus sum」を確信する」という訳語をあてることには賛成しがたい」とも述べている。この指摘も正しい。しかし、「確知する」と訳すことによつて、困難が解決されると思えない。なぜなら、certus sum は一人称以外で語ることができないという仕方で「主観的」だからである。

《討論》

中川 純男

監修 中川 純男
記録作成 佐藤真基子

熊田陽一郎
一者に触れる、あるいは神を見るというのはアウグスティヌスにもプロティノスにも共通の体験だろうと思う。それがアウグスティヌスの場合、*memoria* として残っているところとところが面白いと思う。 *erantque certissimus* という箇所では最上級が使われている。この最上級の意味も伺いたい。 *certus* ではなくて最上級として描かれていて、それが *raptus* から記憶という形で心の中に蓄えられる。このような確実性をもってアウグスティヌスは懐疑的なものを打ち破っていくと理解してよいだろうか。

memoria が記憶であることはもちろんだが、 *mecum erat memoria tui* というように *mecum* という語がともなっている。これは、「私と一緒に」ということで、意識のような記憶、「覚えている」ということである。意識に現前しているという意味での記憶であり、潜在的な記憶ではない。 *mecum erat memoria tui* と次の文章が内容的にどのように関係するか書いていないが、先程は記憶によって、 *illo modo dubitabam* が可能になったと解釈した。

どうして最上級かということも正確に答えることはできないが、ただ、 *neque illo modo dubitabam* の *illo modo* とこの最上級 *certissimus* とは同じことを指している。「いかなる意味でも疑わなかった」が *erantque certissimus* と言い換えられている。最上級は疑いが一切ないような *certus*、*certus* でない要素を完全に排除した *certus* を表しているとしたか、さしあたっては言えない。

熊田陽一郎

するとやはりこの体験は非常に貴重なものであったとい

うことか。

中川 純男

そう思う。アウグスティヌスにとっては *certus* の原点になっている。

柴田美々子

今のことと関係するかもしれない。日本語で「確実性」や「確か」といういろいろな言葉があるが、『告白』第八巻冒頭のテキストに *nec certior de te, sed stabilior in te esse cupiebam* とあり、*stabilior* を「確実に」とか「確かに」と訳してもよいところを、*certus* が問題なのだとはっきり分けていただいたこと、言葉が違うのだと言っていたことが非常にありがたかった。日本語で言うとき、もし *stabilior* を「しっかき」と言うならば *certus* は「はっきり」と言うのだろうか。つまり、「はっきり見える」ということであるが、ただ、「はっきり見える」という場合、ここに鉛筆があって疑いがなく、確かにここに見えているのだというふうなレベルの明証性は *certus* ないし *certum* であると思う。『告白』の特に今の七・一

七・二三以下のところで挙げられている *certus* は、はっきり見えているというだけではない。まだしっかきはそこに一緒になれないが、愛するべきものがある、一緒になるべきもの *cohaerere* するべきものがある、愛を向ける目標というか、そちらに自分が向かっていくべき目標がはっきりと見えたというような形での確実性であろうか。

中川 純男

そう言ってもよいと思う。

柴田美々子

nec certior de te, sed stabilior in te esse cupiebam というのも、ただはっきり見えたというだけではなくて、*cupiebam* と、そちらに近づきたい、びたっとしたいと望んでいるという状態、それは目標が見えていると言っているのではないかと思う。そういうことと、*certus esse* という一人称の表現がアウグスティヌスにおいては結びついているとお考えなのかどうか。 *Contra Academicos* では *certum habeo* という形を使っていることは、引かれているテキストでは、普通の明証性のような気がした。引か

れたデカルトのテキストの場合にはまた少し違いかもしれないが。アウグスティヌスの中で *certus esse* という一人称を、自分の方向性と結びつける読み方は読みすぎなのかどうか教えていただきたい。

中川 純男

むしろやはり結びついていると思う。なぜかというところ、前に教父研究会で岡部さんと論じたことがあるが、先程のところでは懐疑論を反駁するといったときにアウグスティヌスが出してくるのは世界が存在するかしないかといったことばかりである。3たす5は8であるとか。そういったことが生きることに関わるような真理とどこで繋がっているのか、つまり目的の知識とどう関係するのかということであるが、わたしは繋がっていると思う。どうして繋がっているかというところ、そこに自分というものが入り込んでくるからである。単に世界があるかないかではなく、世界があるかないかを自分を知ることができると言われていた。このような確実性を知ることができるということが、目的の知識と繋がっていると思う。 *certus* を一つの領域と言ったが、そういう領域の中に目的の知も入り込んできている、

或いは入り込んできたことを確認するような経験をアウグスティヌスはしたと思う。だから、目的の知という問題意識はある意味ではアウグスティヌスのものとは少しずれるかも知れないが、しかしそれが重要な問題であることは確かである。つまりそのことをはっきり自覚的に問題にしたのはプラトンだと思うが、プラトンが『国家』第六巻で、目的というものは全ての魂がおぼろげに見ているけれどもそれが何であるかをしっかりとつかむことが出来ないものである、しかしつかむことが出来ないがゆえに、今の判断、善い悪いの判断を間違えることがあるもの、それが目的であると言おう。そこに二重構造があって、目的というのは善いという概念に非常に近くほとんど同じであるが、目的があるから善い悪いの判断ができる。つまり善い悪いの判断は二重なのである。これはアリストテレス以来言われていることである。そして、目的としての善いということ、「遠く」という言い方がされるけれども、分からないこと、つまり実現していないことである。だからこそプラトンは知識が必要だと言おう。しかし、そういうものがどこかで確かに捉えられる場所というのがあって、そこから先はまだよく分からないが、それがおそらく *certus sum* であろう

という見通しはもっている。だからその意味では *certus sum* というのは何か単なる意識ではなくて、超越的なものに関わるよう場所であろうと予想している。

柴田美々子

Contra Academicos のことは分らないが、*certum habeo* はあるが *certus sum* はないと言われたが、アウグスティヌスの話は繋がって『告白』で *certus sum* という明確な表現をとったとお考えなのか。

中川 純男

certus sum に第七巻にあるような意味を与えたのはアウグスティヌスであって、*Contra Academicos* ではまだそうした外れたラテン語の使っていないと考えたほうがよいのではないか。『告白』になってアウグスティヌスは、自分の考えにびったり合ったラテン語表現を見つけたのではないか。或いはラテン語そのものが変わっていたのかも知れないが。

荒井 洋一

『告白』七・二〇・二六のテキストで何か質問ができないかと考えていた。それからまた、出村先生がおっしゃった、*certa conscientia* についての、以前のご論文のことでも思い起こしながら考えていた。結論から言うと、*certus sum* には自己認識が関係していないかということである。

中川さんは *certus sum* の分析に関して順序ということに触れ、まず神を見ることが、神認識の経験があり、しかしそれは持続できないので記憶が生じてくるという流れで分析された。その神認識と *certus sum* とにおいて、何か自己認識の成立が絡んでこないか。

中川 純男

それはまさに関係していると思う。確実性を保証しているのは自己認識であるが、自己認識というのはそれだけでは非常に捉えどころのない概念である。*certus* という言葉はもととは完了形であって、何かが終わった状態である。つまり見るといふことがあって見終わった状態がくる。この順序が、確実性という概念を成立させる。順序、連続性のようなものは自己認識を介さないと出てこない。だから自

己認識は論理性の根本であるとわたしは思う。その上で *certus* という言葉がどのような意味をもっているかを考えると、見るから見たへの移行が確実という概念を生んでいると言えるのではないか。

柴田 有

『告白』七・一・一に關係して、確実性と信との関わりをどのように考えればよいのか。

中川 純男

まず *unde et quomodo* の読み方であるが、*totis mendicibus credebam, quia nesciens, unde et quomodo benesciens* は *credebam* を説明している。つまり、「信じていました、なぜならば知らなかったからです」。知らなかったから信じる他なかった。するとこの *unde et quomodo* は、確信がどこから来たのかが問題ではなくて、どうして不変 *incommutabilem* なのかということ、或いはどのような仕方では *incommutabilem* なのかは知らなかったが、とにかく *incommutabilem* であることを信じていた、ということになる。そして *plane tamen videbam*

et certus eram という箇所はわたしのテーゼを裏付ける。このような *certus* の用法は『告白』では第七巻に集中している。それはアウグスティヌス自身が自覚していることだと思ふ。そして *certus eram, id quod corrumpi potest, deterius esse* というのは判断である。これも特徴的である。判断について *certus* なのである。 *videbam* の後に、確実になる。

山本 芳久

certus 概念についてアウグスティヌスとデカルトの類似性を指摘されて非常に興味深かったが、そこに何か違いもないかという点をお尋ねしたい。彼らの思索全体の動きを考えると、デカルトの場合にはそこで確保された確実性が以後の体系構築というか思索の動きの中で起点ないし出発点として留まり続けると思ふ。それに対してアウグスティヌスの場合には、第八巻になると *certus* の話ではなくて *stabilior* の話になっていくという動きがあると思ふ。それは彼らの *certus* 経験自体の何か違いがあるということなのかどうか説明していただきたい。

中川 純男

今日お話しした範囲では、違いがあるとは必ずしも言えないと思う。違いは両者の目指すものの違いによるのではないか。デカルトにとっては知識体系を組み立てることが目的だが、アウグスティヌスはそのようなことは考えていない。自分の生き方の確かな拠り所が欲しいと思っっている。そういう大きな違いはある。しかし、アウグスティヌスの *certus sum* も、デカルト的な知識ではないが、やはり知識であり、アウグスティヌスが何かを考えるとときいつも立ち返るのはそのような確実性であると思う。それは実存的な確実性、*certus sum*、自分が納得できることから始めるということである。このような確実性を考える出発点にするということはアウグスティヌスから始まったのではないか。これは言いすぎかも知れないが。もしかしたら何かキリスト教的な考え方に深いルーツがあるのかも知れない。そこは柴田先生に何か教えて欲しいと思う。キリスト教的な誠実さのようなものがあるのではないか。ないということではないでしょうけど……。

水落 健治

Contra Academicos 三・一〇・二三だが、わたしは別の脈絡でこれを調べている。これは中身は排中律というか、他にも二箇所出てくるが明らかにストアの論理学を念頭に置いている。これはヒストリカルなインフォメーションとして言うだけであるが、ストアの場合は「説得できない論証」と言われる論証がある。しかしストアの論理学の体系では、なぜそうなのかの説明はない。この五つはそこから出発し、そこから推論していけばよいものとされているだけである。のテキストで言われる *certum* というのはおそらくストアではないのかという気がする。そうすると、中川さんのおっしゃられたことは確証される。アウグスティヌスはストアを使いながらも、その根拠、*certus* を語っていることになるからだ。

中川 純男

やはりアカデミア派の懐疑主義が重要である。懐疑論を裏返しにしなければ確実性という概念はえられない。

水落 健治

題材的にストア的なものを脈絡の中で考えていたと言ってもよいのかも知れない。

鶴岡 賀雄

アウグスティヌスは全く素人であるが、神秘主義の研究に関わってきた関心から、一つ質問させていただきたい。個人的には、*certitudo* とか *certum* という言葉はずっと関心があり、デカルトに絡めていただいたことも非常に興味深い。神秘主義とどう関係するかというと、このミラノのビジョンを俗流に解釈すると、ある種の神秘体験のようなものがあつたといえると思う。神秘体験をする人は、その出来事に関して異様な確実性を持つ。非常に漠然とした宗教心理学的な事実としてであるが、そこで何か自分が得たこと、神を見たり声を聞いたりしたことに関して疑うことが出来ない。よそから見ると嘘だろうというようなことだが、しかしそれを疑うことが出来ない。ある種の私的誠実さをもっている。もちろん怪しい人や詐欺師もいるが、全てがそうではないという気がする。その種の、ある特殊体験の確実さが、宗教心理学的には想定しうろと思う。

それからデカルトに結びつけていただいたのは我が意を得たりというところがある。デカルトに関してはっきりしなかったのが先に聞いておくべきだったが、『省察録』の二、コギトが発見されるころでは *certus sum* とは言わないで、*res cogitans* になった段階で *certus* となるという理解でよろしいだろうか。

中川 純男

certus sum という言い方で確実性を呼んでいるところは第三省察以降である。

鶴岡 賀雄

それは知らなかったので教えていただいた。それで、『告白』第七巻で出てくる神秘体験の確実性と、*cogito* それ自体がもつ確実性、およびそこから或る論理的な帰結が出てきて何かを展開していく起点になりうるという意味での確実性とは、水準が違うと思う。ある種の神秘体験的な確実性、ある特殊な光を見る、神の何かに触れるというようなことがあって初めて得られた確実性、普通のものを見て分かったという確実性ではなくて確実なものを見て

確實になったという確實性、そしてデカルトのコギトもそう解釈できると思うが、ある種の誰でも得られる、自己認識ないし自己意識の確實性である。certus sum という或る意識の領域が開かれていて、それはアウグスティヌスにおいてもデカルトのコギトにおいても同じか少なくとも連続しているという趣旨でお話いただいたと思うが、ある種の新プラトン主義的神秘体験を想定し、そこで得られるような超越的確實性と自己意識の確實性とのあいだには断絶があるのか、それとも連続しているのか。

デカルトの確實性についてはパスカルが有名なけちをつけていて、こんなに ego sum は確實であると言っているのにデカルトは不確實だとパスカルは言う。そのパスカルは何を確實だと思っているかというと、これも非常に有名なメモリアルの記事の中で、神キリストを発見したことがあって certitudo と三回書いている。アウグスティヌスが第七巻で書いている certus sum を、神秘体験ならではの確實性と考えるのは邪道なのか。ここで言われている確實性自体は、デカルトのコギトのように誰でもが認められる話ではないと思う。むしろ普通の人から見れば、そのようなことではないという議論の対象になりうる話であろう。

中川 純男

きっかけは神秘的体験であったとしても、certus sum の構造そのものは宗教的特殊経験ではなく、むしろ一般的な枠組みとして成り立つと思う。つまり、見るということがあって確實だということは、宗教的な特殊経験であろうが日常的な経験であろうが、共通している。例えばわたしは散歩をしていて聖心の庭でカバを見たらカバがいるのは確實だと思うであろう。「見たら確か」というのは一般的構造として成り立つ。ただし重要なのは、アウグスティヌスの場合には懷疑主義を経た確實性であるという点である。そうではない可能性を排除した上での確實性である。こうした確實性を経験としてどこまで一般化できるかということはまだよく分からない。それから神秘経験については、二種類の神秘経験を区別しなければならない。一つはモデルがヨハネ黙示録であるような神秘経験、もう一つはプロティノスのような神秘経験である。後者は合理主義の極致に、言葉で語りえないものに行き着かざるをえなかったという経験である。どちらも神秘主義と呼ばれているが内容は異なる。アウグスティヌスのミラノのビジョンはやはりプロティノス的な神秘経験である。アウグスティヌスの場合、

この後にくるオステイアのビジョンがあつて、これは母親と一緒に経験する共同経験である。これはどちらかかといつとヨハネ黙示録的なビジョンなのかも知れない。このふたつは区別が必要だと思つう。十分な答えになつていないけれども。

鶴岡 賀雄

よく分かりました。そうだろうと思ひました。確認したのは、*certus sum* になるのは何らかの懐疑と相関して成り立つてゐるからであり、懐疑は何らかの形で克服される、そしてなぜ克服されるかであるが、理論的に、合理主義的な思弁、思索、論理の追求によつて懐疑が解消される。『告白』第七巻の出来事はそういうことであつたと考へてよろしいのか。

中川 純男

そうだと思つう。問題は論理の質にあると思つう。つまり、アウグスティヌスの論理は懐疑主義者の論理から見ればおそらく論理ではない。テキストに出てきたが、「自分にとつては確実だ」と、自分にとってはこうであるとしてゐる。

懐疑主義者は、自分にとつてとか誰にとつてといふことを外して確実性を考へようとする。人間にとつては重い、ラクダにとつては軽い、だから重いとも軽いとも言えない、といふ論理である。だから懐疑主義のロゴスは主観性を交へない共通の場所であるが、アウグスティヌスはそれに真向から反対してゐて、私にとつて重かつたらラクダがどう思おつと勝手だといふ確実性を持ち出してゐる。それが、*certus sum* といふ一人称での確実性の考へ方に繋がる。ただ、それが全く主観的で閉じこもつた世界かといふとそうではなくて、自分で自分の言つてゐることが分かつていなければならぬ。そしてこれは反駁される可能性を認めることである。先程誠実性と言つたのもそういう意味である。共通性に向かう場所として、*certus sum* は単に個別的でない重要性をもつてゐると思つう。

(一部、録音されなかつた発言がありました。深くお詫びいたします。)

第一〇九回教父研究会

(二〇〇四年六月二六日 於聖心女子大学)

司会者 柴田 有 (明治学院大学)

発表者 中川 純男（慶應義塾大学）
発言 熊田陽一郎（中央大学名誉教授）

柴田美々子

荒井 洋一（東京学芸大学）

山本 芳久（千葉大学）

水落 健治（明治学院大学）

鶴岡 賀雄（東京大学大学院）